

NEWSLETTER No. 36



Church World Service

パキスタンにて干ばつ減災に取り組んでいます！

CWS Japanでは、今年から外務省NGO連携無償資金協力事業としてパキスタン南部における干ばつ被害軽減事業を行っています。対象地であるシンド州のウマルコートはタール砂漠に近い乾燥地域で、水不足による農業や家畜、人々の健康などへの影響が非常に大きく、緊急的な対策が求められています。3年間の事業で対象としている村は24村で、各年8村の干ばつ被害軽減に取り組んでいます。具体的には、水利効率化に向けた情報がコミュニティへ提供され水利・防災意識が向上する事や、貧困層における飲料水へのアクセスの改善、干ばつ影響地域において農業用水・対応技術へのアクセスの改善という成果を目指しています。

本事業では、持続発展性を担保する為に、プロジェクト内容を現地コミュニティが維持・管理出来る体制を同時に整えています。各村の防災委員会は15名程で、男女混合の委員会となっています。各災害からどう身を守るか、安全な避難場所や避難経路はどこなのかなど、村人の啓発をリードしています。また、本事業でも啓発している家庭菜園が村内のたくさんの部分で見受けられ、野菜が以前よりも食卓に乗り栄養摂取が改善しています。また野菜を買っていたお金をセーブする事によって他の生活必需品にまわせるようにもなったそうです。



村の女性たちによる水汲み作業

井戸水は塩害や汚染によって使えなくなっている井戸が多く、以前は真水が出たが、集中的にそこから水を取り出してしまった為、塩害となってしまったものも多いです。少ないが飲料水として使える井戸は飲水だけに、その他の井戸の水は家畜や洗濯などに使うそうです。今後防災委員会で干ばつ防災計画をつくる際は、水源を持続的にする為に、村の計画として水利計画を整備し、水源が持続的になるように目指します。

これまでの調査でわかってきた事ですが、乾燥地であっても真水の層は（限られてはいるものの）存在します。植生分布や高低差などを加味した上で、電気探査をかけて井戸の開発を進める必要があります。その際、村人が「ここに井戸が欲しい」という声も勘案し、土地利用権等の問題が無い所を選ぶ必要があります。また、ある特定の井戸から出水を過剰に行くと塩水が真水の層に入ってきて、塩水の方が3%程重いので真水と置き換えられてしまうそうです。その現象が起きたあとにまた真水にするのはほぼ不可能に近いので、持続的に真水の井戸を使用するコミュニティのルールづくりが必要です。

貯水池は水を貯める上で重要な役割がありますが、家畜の水飲み場になったりもするので、その衛生管理をきちんと行わないと、近くの地下水源全てが汚染されてしまいます。また、乾燥地では貯水量の4倍の水が蒸発するとの研究結果もあり、地中に貯水施設を埋めるなど、蒸発量を防ぐ工夫が必要です。水が少ない場所での水利の超効率化が求められているわけですが、簡単ではなく、地質・防災のサイエンスとコミュニティの力を存分にシナジーさせ、確固たるインパクトを生み出していきたいと思っています。

(文：事務局長 小美野 剛)

アフガニスタン/コミュニティ防災力向上事業

2019年6月に埼玉県・静岡県で開催した本邦研修での学びを踏まえ、同じ研修員（10名）を集め、タシケント（ウズベキスタン）でフォローアップ研修を8/21-23の3日間にわたり行いました。

研修参加者とまた主催したCWS Japan、Community World Service Asia (CWSA)スタッフ全員にとって、ウズベキスタンは初めて訪れる国でした。言語的にも文化的にも異なる第三国での研修開催のため、戸惑うことも多少ありましたが、これまで何度も顔を合わせ、信頼関係ができていた参加者との研修は気心の知れたリラックスした雰囲気の中で進めることができました。

研修では、先の本邦研修で着手したアフガニスタンにおける地区防災計画づくりガイドラインの最終化に向け、CWS Japanと協力会社である国土防災技術株式会社の専門家によって、日本で実践されている早期警報の取り組みとしてマイタイムラインやモニタリング、防災訓練などを紹介し、アクティビティ体験も行いました。

そんな中、今年度新たに対象地として加わったナンガハール県カマ地区のハザードマップを研修参加者が自力で製作し、研修に持参した様子を見て、彼らのマップ製作技術習得の定着が見られ、初めて等高線の入った白地図に向き合っていた初心者の頃を考えると大変感慨深いものがありました。

最終日には、ガイドライン最終化作業を含む、残りの実施期間の活動計画づくりで終わり、次回の評価会議での再会を約束して閉会しました。

(文：プログラム・マネージャー 牧 由希子)



タシケントでのワークショップの様子

Transitional Shelter for the Affected Families of the Central Sulawesi Earthquake: A Hope of a New Start

CWS Japan, in partnership with CWS Indonesia, built 200 Transitional Shelters in the affected areas of the Central Sulawesi Earthquake with support from Japan Platform. CWS Japan team visited some of the shelters in March, and here is the story of one small family.

Yestin (46) was born and raised in Jono village at the foot of lush green mountains in Sigi regency of Central Sulawesi. She is a farmer, and her source of living, at least till September 2018, was the chilies she grew in her farming land near the mountain. When the earthquake hit on September 28, she was in her field, working. She rushed back to see her house, but it was already fully collapsed. For the first few days she stayed at an evacuation camp nearby with her 18-year-old son. Soon it became difficult to live in the camp, so she built a small hut near her house. In January, she was selected by the village committee for CWS's Transitional Shelter project. The construction started in February, in the same place where her old house used to stand. She moved in her new transitional house with her son towards the end of the month. She is trying to restart her life with whatever she could retrieve from her broken house. "This village is where I belong, this is where I will continue to live", she says.



Jono村で建設した仮設住宅

There are many families like Yestin's, who lost everything after the earthquake last year, but found a way to make a fresh start at the Transitional Shelters built by CWS with support from Japan Platform. After the completion of the project, CWS Japan conducted a short Endline survey in a random sampling to understand the views of the beneficiaries, and found that the beneficiaries are quite satisfied with all the aspects assessed such as construction period, comfort, structure strength, building materials and design/layout.

(文：Research Coordinator Sangita Das)